II—1　日本研究のパラダイム

——その多様生を理解するために——

（議長　上山春平）

発表　**J・V・ネウストプニー**

私たちが日本研究を真に発展させるためには、一つの学問分野としての日本研究を分析的にながめながら、日本研究者としての自分の行動とそれが持っている意味を理解する努力をしなければならない。自分自身の研究活動と他人のそれを考える場合、ある人が正しく、もう一人が間違っているというような簡単な判断で事をすますわけにはいくまい。また、将来の発展のためには、最善を尽し、真実を追求するという従来の素朴な態度でも十分だとは思えない。必要なのは自他の「日本研究」を十分対象化できるような視点を探し出すことであろう。

こうした課題への第一歩として、私はここで、一九八〇年代後半に世界――主として日本以外――で行われている日本研究の多様生を理解するために有効だと思われる三つのフレームワークを提示し、それぞれについて検討を加えたいと思う。三つのフレームワークとは、

Ⅰ　日本研究の地域的スタイル
Ⅱ　日本研究のパラダイム、及び
Ⅲ　日本研究の機能的タイプ

と、私が呼んでいるものである。

ところで、日本研究の考察をはじめる前に、「日本研究」という現象の境界をどのように定めるかという問題にふれておく必要がある。日本研究はしばしば、教員などの教育の過程以外の行動、あるいは専門的な研究者の行動だけを指すように考えられているが、私はこの狭い意味の研究と、大学院生や学部学生による研究、さらに大学や学部の教授過程も含めて考えていきたいと思う。なお、専門的な日本研究と並んで、日本研究のネットワーク以外の学者（例えばレヴィ・ストロース）やジャーナリストなども日本の社会・文化について発言することがある。これは日本研究と呼ばなくてもいいかもしれないが、専門的な日本研究と密接な関係があるので、つねに日本研究と関連づけながら考える必要がある領域であろう。

以上が、私の小論の出発点である。

Ⅰ　日本研究の地域的タイプ

研究行動の地域的タイプを考えるさいまず頭に浮かぶのは、ガルトゥング(J. Galtung)の「知的スタイル」の概念であろう。一九八一年に発表された「構造、文化と知的スタイル～サクソニク、テユートニク、ガリクならびにニッポニクなアプローチを比較して」と題する論文の中で、ガルトゥングは、自分のインフォーマルな経験を大胆な筆致で記述し、「知的雰囲気」の類型論を提唱したのである。むろん、「知的雰囲気」といっても、この広い領域の中で彼がふれたのは、研究行動

の形態についてでしかないのだが。

さて、ガルトゥングによると、SS（サクソニク・スタイル）の中心地は、Oxbridgeとアメリカの主要な大学、TS（テュートニク・スタイル）の中心地は、ドイツのミュンスター、ハイデルベルクなどのように小さく、古典的な大学にあり、GS（ガリク・スタイル）のそれはパリ、NS（ニッポニク・スタイル）については、当然の事ながら、東大―京大がその中心地であるという。

「知的雰囲気と呼べるかどうかはともかく、私自身の体験に照らしてもSS、TS、GSとNSは、確かに異なるパターンを持っていると思う。私自身の場合、プラハで教育を受けた一九五〇年代には、TSの限界をはっきり感じながらも、やはりそれに強く影響されていたのだろう。一九六〇年代の後半にオーストラリアに移り、アメリカの学界とも頻繁な交流を始めた頃は、私にとって親しみのうすいSSに慣れるのは相当に困難だったことを思い出す。その当時の私とオーストラリアの学問の間には、後で述べるパラダイムに関しては格差がなかったので、あの違和感の出所はやはり、ガルトゥングの言うスタイルの相違ということ以外には思いあたらない。なお、その時はすでに日本留学（一九六〇～六二年）の時からのNSの経験があったので、SSが私にとって最初の異質のスタイルであるというわけでもなかったのである。

では、ガルトゥングは、これら四類型をどのように特徴づけようとしているのだろうか。彼によると、まず、SSはデータ（資料）を重視し、理論に関してはあまり強くない。理論があったとしても、それは「中範囲」の理論になりがちであるし、しかもその理論は個々の学者間において異なるということはなく、皆に共通の理論である。また、SSにあっては、学者が一つの社会をなし、学会発表などでは、共通の知識体系への貢献いかんという観点から評価されるのが普通であるという。

これに対して、TSとGSは、ともにデータに弱く、理論を重視する。学者の社会はより細かに刻まれており、学会での他者の発表はまず批判されることが多い。しかし、TSでは、教師と弟子の関係が存在するが、GSではそれぞれの学者が別個の世界を作ることが多いという点で両者は異なる。

NSはSSと同様、データを重んじるが、理論や学者の社会は「家元」式で、範囲が小さく、学会での討論は、相手を批判するのではなく、その立場を明らかにさせる所で停まる。これがNSのイメージとしてはやや古いものであることは、ガルトゥング自身が認めているが。

以上がガルトゥングの類型の粗描だが、言うまでもなく、彼の理論は実際にはもっとキメ細かく、洗練されていることは事実である。著者自身が明記しているとおり、もっと考え

なければならないことがいくつかある。例えば、個々の中心地の他に周辺地もあるし、ある周辺地はいくつかの中心地の影響下にあるといった事態も考えられよう。また、以上のスタイルの他にもまだインディック、シニク、アラビクなどのスタイルを想定することもできよう。そして、データに基づく記述が待たれているのは、これらの第五、第六のスタイルだけではなく、既述のSS、TS、GS、NSについても同様である。このこともガルトゥング自身が認めているところである。

では、それ以外に問題はないのか。先にも述べたように、SS領域とTS領域とではその研究行動は確かに互いに異なっているし、ガルドゥングがあげた個々の特徴に関してもほとんど納得できるにせよ、いくつか問題もある。

二、三のケースを示そう。SSでは確かにデータが重視されている。例えば、SSの枠内で研究を進めている尾崎明人の言語の correction の研究は、豊富なデータの上に基づいている。また、B・ブロックの Japanese Syntax もそれなりのデータがなかったわけではない。しかし、TSの中で研究をしているG・ウェンクの日本語研究が広範囲のデータの上に立っていることも事実である。

また、この三人の中で理論的な関心を最も強く見せていたのはB・ブロックで、その次にはおそらく尾崎だと思われる。ところで、これが事実なら、SSを理論軽視と見るわけにもいかないだろう。尾崎とブロックと比べると、TS領域のウェンクには理論的な関心はあまりない。

しかし、アメリカの日本研究全体はどうだろうか。例えば、プリンストンの近代化プロジェクトを見る限り、確かにそこには近代化の理論と言えるほどのものはなかった。しかし、それでも全体としてはアメリカの日本研究は理論的であると筆者には思える。

また、ガルトゥングによれば、NSはデータを重視しているということになっているが、もしそうだとすればデータに弱い「日本人論」風の研究の存在をどう説明するかといった問題も出てこよう。

ガルトゥングの理論の中で最も説得性のある次元は、彼が「論評法」(commentary)と呼んでいるものである。つまり、学者がどのように他の学者の主張に対面するかという問題に関して、彼は次のように整理する——SSでは、共通点を探し、その上に相互理解を築こうとするが、GSとTSでは、共通点よりも異なる意見に目が向けられ、批判がなされる。NSでは、相違点が明らかにされるだけで、論評者は批判を表出するまではいかないという。

しかし、この点についてもガルトゥングのツメは十分でない。これらの異なる論評法のストラテジーをもうすこし動態

的に見ると、SSの日本研究には、批判を売り物にするR・A・ミラーのような人もいるし、NSにも他者批判がないわけではない。また、ドイツの日本研究には好意的な書評ももちろんある。ただし、ミラーが批判する対象は、自分のネットワーク以外の人に限る（例えば、マーティンやジョーデンは批判の対象にならない）し、TSで公の批判や批判への反論が採用されるのも、自分のネットワークの外ではないか。つまり、「批判」するかどうかは、どの文化圏やスタイル圏に属するかで決るよりも、ネットワークとその中の利害関係によって定まるのである。

批判するのに当たっては、人間関係を大切にせざるを得ない内輪では批判がむずかしく、「外」ではやさしくなる。このような利害関係の重視それ自体は普遍的なルールだろうが、内と外の範囲は、歴史的に変わるものである。アメリカのような社会では内の範囲がもっとも広く、ドイツやフランスのような社会ではもっとも狭い。この仮説が正しければ、ガルトゥングのスタイルは、文化圏の違いから生まれるものではなく、社会の発展段階の結果だということができる。ただ、地域的に接近している社会同士は共通の発展段階にある場合が多いので、「論評法」が地域的な「スタイル」のように見えてきたのかもしれない。

しかし、私がガルトゥングの理論を修正し、このような仮説を述べようとするやいなや、基本的にはガルトゥング自身と同じような落し穴に落ちてしまう。つまり、こうした考察は、ガルトゥングがTSと呼んだスタイル、すなわちデータなしの理論作りを認めるスタイルの中での行動に他ならないわけである。

ガルトゥングの理論を修正しても、最終的にはまだ、地域的、文化的な特徴が残るかもしれない。しかし、それを確かめるためには、まず日本研究の実証的調査が不可欠であると思う。しかも、その調査は、最近までそうだったように、人員、講座、文献目録に関する資料を集め、個々のグループの歴史を調べていくような伝統的な様式のそれであってはならない。研究行動の実証的調査の眼目は、対象グループの研究行動を明に暗に規制していると思われるすべてのルール（ストラテジー、マクシムなど）を設定し、それが具体的な行動の各場面においてどのように適用されるかを確定するところにある。例えば、他人の論文を読む過程、本人が論文を書く過程、具体的な討論の過程、講義、ゼミの過程など、具体的過程の一つひとつに分け入った実証的研究がない限り、私たちの日本研究についての理解を確かな基盤の上に立たせることはできないだろう。

「地域的スタイル」のフレームワークを検討する中で明らかになったことは、このように、類型論そのものを成り立た

せるために必要な実証研究の不在、という事態だったのである。

II　日本研究の発展段階的タイプ（パラダイム）

筆者が一九八〇年に提唱した「日本研究のパラダイム」は、日本研究の発展タイプ、つまり、日本研究の歴史的発展を類型的にとらえる試みだった（ネウストプニー一九八七、三〇八頁）。つまり、近代社会や現代社会においては、日本研究に関して次の三種類のパターンを見分けることができるという認識の上にたって、日本研究の発展過程を見極めようとするものであった。

一　ジャパノロジー型パラダイム
二　日本研究型パラダイム
三　現代型パラダイム

三に関しては、最近、「ポスト・モダン」という用語が使われるようになったので、「ポスト・モダン型」と言ってもいいだろう。

この三つのタイプを検討する前に、二、三のことを断っておく必要がある。

まずはじめに、このパラダイムの理論は、「パラダイム」という用語を使ってはいるものの、必ずしもT・A・クーンのいうパラダイムと同義であるとは限らないということである。

また、私がここで使うパラダイムという用語は、日本研究のある体系のすべてを意味するのではない。個々の体系には多くの特徴があるが、「パラダイム」に関係あるのは、普通その一部だけである。他の一部は、前節で述べたような地域的タイプ、さらに一部は、その体系の社会的機能と関係があるかもしれない。例えば、ある研究が学際的な研究だとすると、これはパラダイム的な特徴である。なぜなら、学際的研究は、ジャパノロジーにも、日本研究型パラダイムにもなかったからである。しかし、論文引用の場合、その論文が何ページから何ページまでにのっているかを書かないのは、パラダイムの特徴ではなく、おそらくニッポニク・スタイルの特徴であろう。また、日本研究から文化の研究を除こうとする立場は、その日本研究体系の社会的機能（直接貿易を促進し、文化などには関心がないということ）の結果だという可能性が大きい。

言い換えれば、私たちの研究行動のすべてがパラダイムに支配されているというわけではない。日本研究がどのような性質のものになるかを決定する複数の要因があり、最終的なアウトプットは、これらの要因の交差や相互作用によって定まるのである。

もう一つ、パラダイムについてしばしば誤解されている点は、パラダイムの評価性である。というのは、私の理論では、

ジャパノロジー型パラダイムは近代前期、日本研究型パラダイムは近代、現代型パラダイムはポスト・モダンの時代に生み出されるが、ここでいう近代前期、近代、あるいはポスト・モダン（近代以後）は、評価的観念ではない。現代の社会は、近代社会より生産性が高いが、それだけのことでより良い社会だとは言えない。同様に、日本研究の現代型パラダイムは、日本研究型やジャパノロジー型より多くの研究を抱擁している（〝生産性が高い〟）が、現代型パラダイムによる個々の研究は、他のパラダイムによる研究よりも質がいいとは限らない。ワグナー、ヒンデミット、シュトックハウゼンなどの作曲家のうち、誰が最良の作曲家か、言えないように。

（一）ジャパノロジー型パラダイム

ジャパノロジーは、一次的に近代社会前期の意識の上に立ち、確立されつつあるが、されたばかりの近代社会と、世界との関係を位置づけようとする試みの結果である。日本は、心理的かつ（多くの場合）地理的に離れた国であるので、日本研究には、「世界を知る」という教養上の価値があっても、具体的な実用価値はあまりない。直接の接触もすくない。もちろん、この型の日本研究が「東洋」の社会を対象にしている東洋学の中で育ってきた、あるいは育っているという事情、また当然、同時代の社会科学一般の雰囲気にも強く影響されて成長してきたという事情も、ともにジャパノロジーの形成に貢献したのである。

十九世紀後半、二十世紀初期のヨーロッパの社会や現在の発達途上にある国々が、ジャパノロジー型の日本研究が生み出されるために、もっとも適切な条件を備えている。しかし、社会全体の近代化が完成しても、科学の領域では元の古いパターンが残る場合もある。現実に、今日のドイツおよびアメリカなどの一部の日本研究者が使っているパラダイムは、依然としてジャパノロジーである。そして「東洋研究」の伝統が強い研究機関ほど、この傾向はいちじるしい。例えば、オーストラリアの日本研究で最も歴史の古いシドニー大学の日本研究には、明らかにジャパノロジー的な特徴が残っている。

以上のような性質をもっているジャパノロジーの研究対象は、当然、同時代の日本よりも、日本の過去である。ジャパノロジーでは、日本の政治史、文化史、文学史、史的言語学がもっとも代表的な研究分野である。一九六九年に私が出会ったボフム大学の大学院生は、史的研究でないと、日本文学で博士号がとれないと不満をもらしていた。もちろん、語学の面では、学習の対象になるのは、主として、文語である。私自身が、一九五〇年代にプラハ大学で日本語を学習していた時、文語は一年の後半から習っていた。ただ、プラハでは、現代語も体系的にカリキュラムに組み入れられていたが、ジャパノロジーの色彩のさらに強い大学では、文語が圧倒的に

多く、口語は体系的には教えられていなかったのである。

ジャパノロジーの理論的な枠は、東洋学である。東洋学は文献学(philology)の流れに属し、個々の学科(歴史学、文学の研究、言語学など)には分かれていない。日本学者は、文(text)の種々の側面を研究することに生きがいを見出し、歴史的な文書の研究から、文学作品、あるいはいくつかの文の文法的研究へと、その対象を次々に移していく。

私の同世代の人というよりも、私と同じパラダイムの人が、ジャパノロジストをあざ笑い、「理論や方法論がない」と批判していたが、実は、この態度は明らかにクーンのいう「パラダイムの交代」「革命」の徴候であった。

ジャパノロジー型日本研究の典型的な結論は、「日本」という現象に関して肯定的だったが、「異国日本」という日本観は、この研究に出発点がある。明治の日本文化が研究対象になっても、同時代の日本は注目するに値しないものだとされていた。

容易に予想されることだが、このタイプの日本研究は、経済、外交、などの分野ではほとんど応用されることがなかったと言っていいだろう。

このことは、日本研究の社会組織からもうかがえる。ジャパノロジーの土台は普通非常に限定され、日本研究の講座を置いている大学でも、教師一名か数名、学生数名がその中核になっている。もちろん、パラダイムの人口には、その中核だけではなく、周辺的な人口もある。後者には、日本研究と部分的な接触しかもっていない人間が数えられ、ジャーナリストや文化官僚が加わるのが普通である。時には中心的な人口が少なくても、この周辺人口が多いこともある。例えば、現在の日本では、ジャパノロジー型パラダイムに属している周辺人口がかなり多い。これらの人々は、海外の日本研究をすべてジャパノロジーであるべきもののように見ている。海外の日本研究者が、古事記、平安朝文学、平賀源内、夏目漱石、神道あるいは歌舞伎の研究に携わる人だと考えているのである。

(二)日本研究型パラダイム

しかし、ジャパノロジーは、現代の日本研究から見ると、直接一段階前のパラダイムではない。現代とジャパノロジーの間には「日本研究型パラダイム」という形態がある。

ジャパノロジーは明らかに構造主義以前のパラダイムであった。それに反抗し、第二次世界大戦頃から、一部の日本研究者は、日本研究の構造主義的なパラダイムを作ったのである。

ここで「ジャパノロジー」と「日本研究」という表現について一言つけ加えたいと思う。「ジャパノロジー」(本当は「ヤパノロギー」)ということばは、ガルトゥングがいうテュート

ニク・スタイルの研究圏で使われ、「日本研究」はサクソニック圏で使う方が多い。それぞれが使われる圏内では、このことばはあるパラダイムを指すのではなく、中立的で、ただ単に「日本研究」のみを意味する用語である。にもかかわらず、私は、いずれにも多少特殊な意味を持たせて使っているので、御了承いただきたい。日本文の中でJapanese Studiesをパラダイムの名称として使う時は、区別するため、「日本研究型」と書くことにしている。

さて、ここでも私自身の体験から語りはじめることにしよう。プラハではジャパノロジーから日本研究型パラダイムへの移行は、私の大学時代、一九五〇年代の前半から始まった。前の世代の学者たちはまだ「東洋学科」だけで教育を受けていたが、私は東洋学科と同時に言語学科の講義にも出て、一分野の理論や方法論を習うことを誇りにしていた。また自分のことを「ジャパノロジスト」と呼ばずに、「言語学者」と呼んでいた。

私たちが重点を置いていたのは、理論や方法論の他に、歴史主義と「最終的に」見切りをつけることであった。もちろん、歴史の研究を止めることは考えていなかったし、中には、日本史を専攻する者もいた。しかし、私たちが疑問に思っていたのは、ジャパノロジーにおける「理論や方法論なし」の歴史研究と、先に歴史主義と呼んだ世界観であった。私たちは、通時論を否定しはしなかったが、共時論の妥当性を否定する構造主義以前の時代の考え方をあまりに素朴だと思っていたのである。戦前からすでに構造主義のとりでであったプラハの学問的雰囲気の中では、もちろん、私たちは反歴史主義の先駆者ではなかったのだが。

いずれにしても、ここから一つの問題が提起できる。すなわち、ヨーロッパの美術や芸術一般では近代的なパラダイムが一九一〇年代に確立され、言語学などでは一九二〇年代の後半にヨーロッパやアメリカのすくなくとも一部のネットワークで構造主義が勝利を遂げたにもかかわらず、日本研究(そして東洋研究一般)では近代的なパラダイムの登場がなぜこのようにおそかったかという問いである。これは興味深い研究課題である。むろん、ヨーロッパよりアメリカの方が早かったという事情を考えるべきだし、第二次世界大戦前にも日本研究型パラダイムの先駆者もいたはずで、私たちは彼らについて現在余りにも知らなすぎるという面も頭におくべきだろうが。

さて、日本研究型パラダイムにはいくつかの特徴がある。その一つは、「応用性への傾向」と呼ばれるものである。アメリカの日本研究型パラダイムのもっとも極端な例の一つであるベラーの『徳川時代の宗教』を見ると、このパラダイムの社会的な役割について疑問を持たない人はいないだろう。し

かし、この時代の日本研究は確かに、個々の学問分野(discipline)への貢献をしたのみならず、学問以外の世界での実用性の意識をもっていた。これは、戦時中のアメリカの日本関係の人類学(ベネディクト)や言語学(ブロック、ジョーデン)の研究で明らかだ。また、戦後の日本研究型パラダイムによる個々の研究にも同じような「応用性への傾向」が見られる。歴史にしても、戦後流行するようになったのは現代に近い近代史だったことも決して偶然ではないと思われる。

日本研究型パラダイムの特徴を考えるうえで不可欠のテーマは「近代化」の問題である。つまり、近代社会のメンバーである日本研究者は、自分自身の社会が日本より近代的なパターンを持っているように考察し、日本も当然このような特徴を展開させるべきだという確信を持ってうたがわなかった。日本研究型パラダイムの日本への態度は、ヨーロッパ中心主義的で、冷淡であったと言ってよい。

次に、研究内容の範囲という点では、日本研究型パラダイムは、以前に見られなかったほど広くなり、現代日本のあらゆる側面の研究が発達した。ジャパノロジーには人文科学への強い偏りがあったのだが、日本研究型パラダイムでは、社会科学にも関心が広がり、しかも、現代の社会の研究も他の分野と同等の地位を得るところに到った。語学面では文語よりも現代の口語が語学習得の対象になった。しかし、研究者が日本社会に本当にとけこむことが少なかったせいか、日本語の会話能力は、まれな例を除くと、現在のような高いレベルには達しなかったのである。

(三) 日本研究のポスト・モダンのパラダイム

もう一度私自身の経験へ戻らせていただきたい。すでに述べたように、私たちは、ジャパノロジーとの対立を強く感じながら、一九五〇年代半ばのプラハで、構造主義者として日本研究型パラダイムに加わった。私自身は、構造主義言語学のもっとも正統な分野とされていた音韻論を専攻し、私の日本研究の第一期は、ほとんど音韻論の研究が占めている。

しかし、言語学界の雰囲気は、一九五〇年代の後半から変わりはじめ、一九六〇年にならないうちに革命がおこった。御承知のように、チョムスキーのSyntactic Structuresが一九五七年に出版されたし、それと同時に、社会言語学という新しい研究分野が現われた。

むろん、一九六〇年代、七十年代においても海外で日本語の研究をする言語学者たちの一部には、依然としてジャパノロジーの中でphylology風の史的研究をつづける者もいたし、少数ながら日本研究型の文法の研究にたずさわっていた人もいた。しかし、ほとんどの構造主義者は、新しいパラダイムへ変わっていった。アメリカでは、E。H。ジョーデンがその代表的な人物である。当時「若い学者」であった私た

ちもこの新しいパラダイムに加わった。私に関して言えば、私の音韻論の性質が変わっただけではなく、その上に社会言語学、特に言語問題の研究が新たに私の興味の対象となり、研究の中心がその方向に転向してしまったのである。

一九七五年頃、フィラデルフィアの友人の家で話していた時に、言語学の中の革命、そして日本語研究の中の革命の可能性が話題になったことがあった。その時、私は日本研究全体のパラダイムが今後、どのように変わるかということを考えていたが、実は、すでにその当時日本研究の他の分野は刻々と変わりつつあったのである。ただ、私たちには、あまり身近なものだったせいか、それがまだはっきりと認識できなかったわけである。いずれにせよ、ポスト・モダンの日本語の研究の推移と同様なパラダイムの移り変わりが、日本関係の社会学、歴史などにも進行中だということが目立ったようになったのは、一九八〇年代の始めであった。

ここで日本研究全体のデータに基づく分析を試みるのには、私の力量はたりない。したがってここでは、日本研究型パラダイムになかったと思われる、現代型（ポスト・モダン）パラダイムのいくつかの問題点だけをとり上げ、検討を加えてみたいと思う。

まず、日本研究の現代化を呼びおこしたのは何かという問題がある。日本研究型の発生の背後には、日本と他の国の経済競争があったと思われるのに対し、現代型パラダイムは一方では国際社会での協力と多民族化への傾向、他方では先進国での生産の向上とそれに伴う社会観の変化の産物である。さらに日本の経済力の上昇も現代型パラダイムの登場に関係したと思われるが、こちらの方は、直接パラダイムの形成に貢献したというよりも、後で述べる機能的タイプに影響したのではないかと思われる。

これらの新しい要因は、日本研究型パラダイムの場合にそれほど目立たなかったいくつかのストラテジーを生み出した。

日本研究型パラダイムにとっては、日本は基本的には単一社会で、内部のバリエーションは目立たなかった。もちろん、これは日本研究だけの特徴ではなく、構造主義時代のどの学問分野をとっても、社会階級、少数民族、地方社会、男女差などはあまり話題にならなかった。

しかし、現代の日本研究者は、日本の階層、在日朝鮮人、アイヌ、女性問題などに非常に強い関心をよせている。オーストラリアの学生が在日朝鮮人を研究テーマにすると、日本の関係者の中にはこれを政治的な行為のように解釈する人がいる。しかし、これは誤解である。現代型パラダイムの中では、政治的な信条と無関係に、このようなテーマが選ばれやすい。一般に、パラダイムは、政治に対して中立的だと言える。社会のそれぞれの発展段階においてさまざまな政治信条

をもつ研究者がいるが、彼らには異なる社会的関心（次の第三部を参照）があっても、基本的な研究態度（つまり、パラダイム）が同じであることが多い。

ここでふれておきたい現代型パラダイムのもう一つの特徴は、社会問題への関心である。構造主義時代の社会科学にとって「問題」(problem)は、人気のある概念ではなかった。しかし、現代型パラダイムでは、バリエーションなどから生まれる社会問題は、頻繁に選択される研究テーマである。オーストラリアの学生が、日本のsubculture、あるいは浮浪者を研究テーマにする場合も誤解されやすい。このテーマを選んだ学生は左翼的な思想の持主かもしれないが、そうでないかもしれない。つまり、このテーマは、研究する主体に固有の特性によってというより、採用されるパラダイムそれ自体によって生成されるテーマである。

現代型パラダイムの特徴は他にもまだあるが、その点については「日本研究のパラダイム」（一九八二）で詳しく述べたので、そちらを参照していただくこととして、ここで指摘したい点は、現代型パラダイムのテーマ範囲が、以前の二つのパラダイムより広いということである。ジャパノロジーの典型的な研究は、人文科学系統の歴史的研究であったのが、日本研究型では、それに社会科学的なテーマと、現代日本の研究が加わった。さらに、現代型になると、以前は「学問」と見なされなかった種々の研究テーマも、日本研究の枠内で扱われるようになった。例えば、オーストラリアの大学の中では、日本文学、政治学や社会学と同時に、ビジネスコミュニケーション、通訳の技術、観光業に関する科目なども「日本学科」で教えられたり、研究されたりするようになった。古典的な「日本研究」の概念からはよほど離れたアプローチである。

当然、この関連で、日本研究の中核的人口だけではなく、周辺的人口も、現代型パラダイムで飛躍的に増えてきたことは言うまでもない。

しかし、再度ことわっておきたい。先にも述べたとおり、私の場合のパラダイム理論には評価的な意図はない。すなわち、現代型パラダイムがジャパノロジーより新しいが、それだけで自動的に、日本研究型のどの研究もジャパノロジーの研究よりすぐれているとは言えない。もちろん、個々の点においては、歴史の発展段階に照応した評価が可能な面もある。例えば、ジャパノロジーより日本研究型、日本研究型より現代型の研究テーマの範囲の方がはるかに広いし、ジャパノロジー段階の研究者の日本語会話の能力が低いとか、日本研究型の学者の日本語能力一般が低いとかいったことは大いに言えそうである。しかし、現代型の質の低い論文よりは、ジャパノロジーの質の高い論文に価値があるのは確かである。つ

まり、日本研究の三つのパラダイム、あるいは発展タイプは、決してそのまま評価次元にもってきてはならないことを強調しておきたい。

◇パラダイムの意義

以上、日本研究のパラダイムについて述べたが、ここで使ったパラダイム理論のいくつかの特徴について総括的に述べる必要がある。

筆者は、ここで使ったパラダイムの概念は、日本研究の発展や現状を理解するために不可欠だと思う。とはいえ、日本研究の発展の方向や現状のすべての特性をパラダイム理論で説明できるという主張は明らかに間違っている。その理由は、今のところ三つあげられる。

（一）パラダイム性の程度

まず、すでに一九八〇年のパラダイム論で指摘したように、すべての日本研究が強くパラダイムを目差すとは思えない。理論的なモデルを提供する学者の研究がもっとも強く他の社会理論とつながり、時代の要求によって段階的に変わる傾向がある。こうしたパラダイム性の強いグループには、厳格な理論研究だけではなく、大衆のために作られた「日本人論」的な理論も含まれる。例えば、disciplineとは関係がうすく歴史的な性質をもつ日本人論はジャパノロジー型で、現代社会を静止的かつ単一的に説明する日本人論は日本研究型である。現代型の日本人論はまだ現われていないがヴォーゲルのJapan as Number Oneはそれにやや近いと思う。

しかし、一定のパラダイムとのつながりの弱い日本研究もある。例えば、日本における日本研究の多くが社会問題を扱ってきたが、このような研究は、政府やその他社会問題の処理を目差す団体の要請で行われる傾向がある。この種の研究の場合、社会問題への配慮は、需要から出発するのであって、必ずしもパラダイムを出発点にするものではない。もちろん、パラダイムの影響があるとは考えられるが、全体としてパラダイム性が弱い。

一般に、需要に応じる研究や記述的な性質をもっている研究、つまり、「個別」的な研究の場合には、パラダイムとのつながりが弱い傾向にあると見てよいように思う。

（二）パラダイム以外のパターン

第二の理由は、この稿の第一部で述べたことと関係がある。つまり、パラダイム理論による説明が適用できないもう一つの場合は、研究行動の個人のスタイル、学派、伝統、そしてガルトゥングが目標にしていた地域スタイルといった要因が顕著に認められる場合である。このような形態は、他の社会科学には存在する（Hymes　一九七五年）が、日本研究にも認められるかどうかは、これからの調査で確かめる以外にな

い。

（三）機能的タイプの存在

パラダイムの理論で日本研究のすべてを説明できない第三の理由は、日本研究の機能がもつ影響力である。つまり、日本研究は、それに参加する人たちのために種々の機能を果すし、その機能によってパラダイムが動かされることがあるということである。この事情については次の第三部でもうすこし詳しく述べたい。

III　日本研究の機能的タイプ

日本研究の現代型パラダイムでは、以前あまり見られなかったメタ理論的な志向が強くなり、個々の研究行動の批評（例えば、いわゆる「書評」）だけではなく、大幅な理論的枠組の批評も盛んになってきたが、その中で日本研究のイデオロギー的役割（Mouer and Sugimoto　一九八六、ベフ　一九八七）も関心の的になってきた。そして私もこうした観点の正当性を信じる一人である。しかし、日本研究の機能は、イデオロギー的機能に限られるわけではない。ここで海外における日本研究の機能的タイプのいくつかを示しながら、パラダイムとどういう関連をもっているか考えていきたいと思う。

（一）イデオロギー的機能タイプ

まず、先にふれたように、種々の政治的な立場を支持する日本研究のタイプがある。体制支持タイプは、その体制の価値体系や利害を支持する。例えば、日本研究のテーマとしては、経済（主として貿易）や国際関係論が主流で、社会や文化の通時論的なテーマはもちろん、共時論的なテーマも選ばれない。予算は、国か企業に供給され、研究員は体制と関係の深い人である場合が多い。教育機関の場合は実用的な語学コースの他にビジネス関係のコースが圧倒的に多くなる。

このタイプの日本研究は、ジャパノロジーに対して敵対的であるが、日本研究型パラダイムがこれにもっとも適している。現代型の態度には余分の要素、例えば、個人間のコミュニケーション、文化や社会問題への関心があり、このタイプと共存しにくいと思われる。

一九八八年現在、オーストラリアの政府は、国中の日本研究をこのタイプに変えさせようとしている動きが見られるが、これを注目して見守る必要がある。

（二）接触機能タイプ

このタイプは、個人のレベルで日本と接触をもっている外国人の利益を代表するタイプである。現代の国際社会において、種々のカテゴリーの外国人が日本人と接触した場合、言語、コミュニケーション、文化や社会行動に関する多くの問題が現われるが、このタイプの日本研究は、これらの問題を処理するための手段である。このタイプは、ほぼ現代型パラ

ダイムの日本研究と一致している。ただし、現在はまだ接触相手になりやすいのは、東京の中産階級の日本人だから、日本社会のバリエーションへの関心がややうすいおそれがある。

（三）異文化理解機能タイプ

日本研究者や学生が日本研究を始めたり、続けたりする動機は、国や企業を助けることでも、個人のインターアクションを助けることでもなく、単なる異文化への知的好奇心である場合が多い。

この機能によって生み出される態度は、経済、政治、現代語の能動的知識を重んじることなく、ほとんどの場合人文科学的研究に通じる。このタイプの研究は三つのパラダイムのどれとでも組み合わさるが、参加者に現実の社会に対して逃避的な傾向があれば、ジャパノロジーが選ばれやすい。

（四）職業維持機能タイプ

日本研究という「職業」を維持することは、日本研究者にとってきわめて重要な関心の一つだから、この機能の影響はすべての日本研究に及ぶと考えてよい。しかし、一部の日本研究者（あるいは日本研究機関）の場合、ほかの機能（例えば体制支持、日本との接触、異文化理解機能など）が弱くなり、これがドミナントな機能になる場合がある。

この場合は、現在の研究環境に照応したパラダイムが再生されることになる。近代前期の古いパターンをもっている研究環境――必ずしも近代前期の社会でなくてもいいが――では、ジャパノロジーが生成され、近代的研究環境では日本研究型が、ポスト・モダンの環境では現代型が選ばれるというようになる。

ある学者が日本研究に従事するのが、文化への関心のためか、たんに職業をもつためか、明らかでないケースが多いだろう。日本研究に携わりながら日本の社会・文化への関心を育てる人が多いだろうが、日本研究を基本的に一つの職業としてしか見ない学者もいる。日本研究の全貌をつかむためには、この機能の存在を認める必要があると思う。

（五）批判機能タイプ

これは一つのタイプではなくいくつかの機能の複合したものであるが、日本研究の参加者が、日本社会の種々の面について批判的な態度をとるので、相互に味方と見なされ、合流する可能性が大きい。

まず、個人として日本人とのインターアクションに成功しなかった学者（あるいは、より一般的なレベルでジャーナリスト）がいる。具体例をあげると、R・A・デールがこのタイプに入ると思われる。

次に、反体制派の学者がいる。これには、日本人も外国人も含まれるが、この人たちは、日本全体に対してではなく、体制だけに対して批判的である。

また、日本企業の世界への進出に対して、別の系列の利益を守る日本研究もある。チャーマーズ・ジョンソンの名前がすぐ頭に浮かぶが、この種の研究の数は、これからさらに増えるであろう。日本関係のジャーナリズムのレベルでは、ブルマがこのカテゴリーの中に入る。

日本研究のこれらのタイプはジャパノロジーには依存できない。社会問題の観点を強調するアプローチだから、現代型パラダイムがこれにもっとも好都合だが、R・A・ミラーのように日本研究型のアプローチをとる場合もある。

以上、海外の日本研究の機能の五種類をあげたが、実際には、もっと別のタイプを考えることもできるだろう。例えば、多くの国の日本研究者個人や研究機関は、日本からの研究費や助成金なしに研究活動を続けられないのが現状なので、日本の団体の日本研究に対する考え方がその国々の日本研究に強い影響を及ぼす可能性がある。しかし、私は、現在、このような現象を以上のモデルにどのように導入できるかはまだ明確ではない。

なお、「機能」という概念を使ったが、これは明らかに「関心」(interest)、「動機と結果」などと関連があるので、この点も究明すべきである。いずれにしろ、「機能」は一人の研究者が意識的に立てる目標だけの問題ではない。ある研究行動に関与する参加者は、研究者だけではなく、需要者、支持者、評論者など、複数の人間であるし、しかも機能が果される過程は、必ずしも参加者の意識的な過程とは限らない。

IV まとめ

この稿では、日本研究を分析的に考えるためのいくつかのモデルを紹介することしかできなかった。

私たち日本研究者は、異なる学派、学術的伝統、地域スタイルなどに属している。また、現在、すくなくとも三種類のパラダイムの中で活動しており、それぞれにおいて違う研究のストラテジーやルールを使っている。さらに、日本研究はその参加者にとってさまざまな機能を果しているが、この機能によって日本研究のありようが大きく左右される。したがって、日本研究の表層は、これらのすべてのカテゴリーの中のストラテジーやルールの交差で決ると言ってよい。

私がここで提出したモデルは、場合によっては一部の日本研究者にとって耳ざわりなところがあろう。しかし、これは必ずしも私のモデル自体のせいで出てくる不愉快な気持ちではないと思う。というのは、私たちは、人間社会の中のバリエーションを長い間あってはならぬものと見なすように教えられてきた。また、最近のものがすばらしく、前のものがおとっていると考えさせられるようになったので、「古い方法論」を使うということは、悪口と同義の文句となったのであ

る。さらに、私たちが必ずある一定の動機のもとで、一定の目標のために行動しているということは、恥ずべきことであって、口にしないだけではなく、その事実を自分自身に対しても認めないようにすることに慣れてきたといったことがあるかもしれない。

しかし、私たちがあるスタイル、あるパラダイム、ある機能的タイプの中で仕事をしているのは、恥ずべきことでも、当惑しなければならないことでもない。

日本研究の多様性は種々の歴史的条件のもとで生み出されたものなので、それを短期間に統一することはできない。いや、そうではなくて、統一すべきではないと明言すべきなのである。例えば、すべての日本研究を現代型パラダイムに統一してしまえば、ジャパノロジーや日本研究型パラダイムにはあり、現代型パラダイムにない長所が、日本研究から抹殺されるという結果に導かれざるを得ないからである。

なお、異なる社会の階層や個人に異なる目標がある限り、日本研究の異なる機能が選ばれるのは当然である。

日本研究の理解は、多様性を取り除くための道具ではありえない。しかし、私たちがなぜ異なる行動をしているかについて理解をもっていれば、もうすこし話し合いの可能性が生まれてくる。言い換えれば、このような理解の水準に達しないかぎり、話し合いの可能性そのものもきわめて生まれにくいのである。

日本研究の研究が、以上のような意味において一層発展するよう望まれる今日、国際日本文化研究センターにますます積極的な役割を果していただくことを要望して、私の報告のむすびにしたいと思います。

＊参　考　文　献

別府春海「イデオロギーとしての日本文化論」思想の科学社　一九八七年

ベラーR。「日本の近代化と宗教倫理——日本近世宗教論」未来社　一九六二年

Bloch, B. Studies in Colloquial Japanese II: Syntax. Language Vol. 22, pp. 200-48. 1946.

Galtung, J. Structure, culture, and intellectual style: An essay comparing saxonic, teutonic, gallic and nipponic approaches. Social Science In-formation Vol. 20, No. 5, pp. 817-856. 1981.

Hymes, D. and J. Fought American structuralism. Current Trends in Linguistics Vol. 13, pp. 903-1176. 1975.

Kuhn, T. S. The Structure of Scientific Revolutions University of Chicago Press 1970.

Mouer, R. and Y. Sugimoto Images of Japanese Society KPI 1986.
Neustupny, J. V. On paradigms in the study of Japan. Social Analysis No. 5／6, December 1980, pp. 20-28.
J・V・ネウストプニー「日本研究のパラダイム」杉本良夫、ロス・マオア編「日本人論に関する十二章」学陽　書房　一九八二年
J・V・ネウストプニー「日本社会のタイポロジー」ロス・マオア、杉本良夫編「個人・間人・日本人」学陽書房　一九八七年
A. Ozaki, Requests for Clarification in Conversation between Japanese and non-Japanese Pacific Linguistics (Canberra) 1989.
杉本良夫、ロス・マオア「日本人は「日本的」か」東洋経済新報社　一九八二年
E・ヴォーゲル「ジャパン・アズ・ナンバーワン」TBSブリタニカ　一九七九年
Wenck, G. Japanische Phonetik Wiesbaden 1954-1959.

コメント　**伊東俊太郎**

いまネウストプニー先生のお話、大変興味深くお伺いいたしました。先生は、日本研究の多様性を理解するために、三つのトピックス、つまり日本研究の地域的スタイルと日本研究のパラダイム、それから日本研究の機能的タイプという、三つのトピックスをとりあげられたわけでありますが、コメンテイターの時間は大変短いと思いますので、これらについてすべて私の反応を申し上げる時間はないと思います。したがいまして、この中で、ネウストプニー先生の年来の持論であるところの「日本研究のパラダイム」という問題にまず限って、私のコメントをさせていただきたいと思います。

この日本研究のパラダイムの問題でございますが、これは一九八〇年にすでにネウストプニー先生が提唱されて以来、皆さんの間に共有されている問題意識かと思います。これは日本学型のパラダイムと日本研究型のパラダイムと現代型パラダイム、ないしはポスト・モダン的なパラダイムという三つがあるわけでございますが、まずパラダイムという言葉を使うと、私がすぐ思い出すのは、トマス・クーンのことなんです。クーンとは私はプリンストンの高等研究所で一年間一緒だったので、いろいろ議論したんですが、これはどうしてもパラダイムの交代ということを意識します。つまり、Aというパラダイムから Bというパラダイムに移行が起こる。一つのものがもう一つのものにとってかわられるという印象を持つわけであります。

たとえば古典力学的なパラダイムから量子力学的なパラダイムへと、みんな研究者がなだれを打って、いわば改宗するといいますか、そういうような印象を持つわけであります。そういう意味でクーンはこの言葉を使いました。しかし、私は日本についての研究について、このようなパラダイムの交代はないのではないかと思います。この三つの研究ともそれぞれユニークな長所を持ちながら現在並存

しているし、そしてまた私の考えでは、並存すべきであると思います。

つまり、もしももうジャパノロジーは古いんだ、ジャパニーズ・スタディズでいかなきゃいけない。ジャパニーズ・スタディズでもいけないんだ、ポスト・モダンでいかなきゃいけないと言って、日本研究が何か一色ののっぺりしたものになってしまうのは、むしろ生産的でない。やっぱりこの三つの研究がどこまでも自分の長所を発揮してゆくことが必要で、その長所はそれぞれあると思うんです。それらがお互いに補いあって、さまざまな方向から、さまざまなジャンルで、さまざまな方法でもって、日本研究を深めていく。これが望ましいことだと思うのであります。今日朝食のとき、ネウストプニー先生にこのことを申し上げましたら、二人が一致してしまいました。先生はもっと、古い型の研究はいけない、新しいものにいかなきゃいけないんだとおっしゃるかと思ったら、そうじゃなくて、この三つともいいんだとおっしゃったので、ぼくは言うことがなくなってしまったわけであります。（笑）

それで、同じになってしまってもおもしろくないので、違うところを申し上げたいと思うんですが、先生はこの三つのパラダイムが、発展段階的に進歩してきた。ないしは変わってきたとおっしゃるんですが、私自身は、日本に対する外国の研究者の方々のかかわり方ですね。世界の中での日本をどう見るかという、その見る目の、あるいはそういう日本研究の意識の変化ということで、やはり三段階の発展があったと思うわけであります。これは先生の三段階とおおよそ対応するかもしれません。しかし、少しずれるかもしれません。それを申し上げてみようと思うんです。

まず、海外の研究者の方が日本についてどう見たか、これは古くは中国の『魏志倭人伝』以来ずっとあるわけです。韓国の『三国史記』の中にも、日本についての記述がございますし、それから韓国の江戸時代に来た使節のいろんな記録も残っております。ヨーロッパと日本の関係について言えば、まず第一番に南蛮学の段階があります。ザビエル、ルイス・フロイス、ロドリーゲスのような人たちが、日本のことを書き、研究しました。その次の段階が蘭学でありまして、ケンペル、チュンベリー、シーボルトというような人たちが、また南蛮学とは少し違った観点から、日本についての非常にすぐれた研究をしたわけでございます。その次のものとして、幕末から明治にかけ、そして第二次大戦まで、外交官を初めとしてジャーナリスト、学者、その他、つまりハリス、オールコック、アーネスト・サトウ、それからチェンバレンやラフカディオ・ハーンを入れなくてはいけないと思いますが、そして最後にルース・ベネディクトの『菊と刀』に至るまで、さまざまな研究がございました。

こういうものを全部ひっくるめて、日本研究の第一段階、日本にどういう目をもって、どういう意識を持って接近するかということの第一段階としたいんですが、それはどういう意味での第一段階かというと、これは自分の住んでいる文明と非常に違った文明が極東にある。つまり異国としての日本、異国研究としての日本研究であります。西欧と非常に異なった文化を持つ国として日本を研究する、異国日本の研究の時代があったと思うんです。これが先生の言うジャパノロジー型の日本研究ということと重なるところがずいぶんあるかと思います。

二番目の段階は、一九五〇年代に始まりましたもので、そして六十年代にピークに達した日本研究、日本に対する接近の仕方であります。それは、近代化日本の研究と言ってよろしいかと思うんですが、ライシャワーから始まりホール、ベラー、ドーア、ジャンセン、それからクレイグとかシャイブリー。また、イギリスのブラッカーさんの福沢諭吉の研究であるとか、オーストラリアのクロウカーさんの研究もそういうものに入ると思いますけれども、ここでは日本

は異国というよりも、明治維新や第二次世界大戦後のみごとな復興に示されるような、近代化の一つのユニークなモデルとしてみられている。そしてしばしば、日本はアジアの近代化の模範であるなどと言われて、そういう意味で日本が研究された。これは近代化の優等生だと言って頭をなでてくれるわけですが、しかし問題がないわけではない。

それは、やはり欧米中心の近代主義という、いわば一元的な進歩史観がありまして、そのどこに日本が位置しているか、けっこう欧米型のところに近づいてるじゃないですかということですね。この意味でなかなかいい優等生だということで言ってくれてるとすれば、それはやはりヨーロッパセントリックな発展段階説という尺度の上で日本を見ているということで、やはりある一つの限界があった。今はそういうふうにばかり日本を見ることはできないと思います。またその近代化ということ自身が、はたしてプラスの意味だけで語れるのか。つまりヨーロッパ近代というものそのものが一つの限界に直面して、かつてのようにその排他的な普遍性を主張できなくなってきているという事情があると思います。ですから、この型の研究にも問題はあるわけですが、しかしやはりある一時期の日本研究を非常に刺激したことは、事実であります。

これがジャパニーズ・スタディズ型の研究ということに、ある意味で対応するかもしれません。

しかし今は第三の段階に入っている。それがポスト・モダン的な日本への接近であります。こうした欧米中心主義的な近代主義というものが崩壊いたしまして、欧米文明を中心とする一元的な発展段階説の上に、すべての文明に序列をつけていくというようなやり方ではなくて、地球上のすべての文化・文明が、それぞれそれ自身の独特な特色を持っていて、同時にそれが他の文化・文明の発展に寄与する、役立ち得る、そういうものとして認識されている時代ではないかと思うのであります。

どこの文化、どこの文明が一番いいというのでもない、どこの文明が一番悪くてどうしようもないというわけでもなくて、中国でもインドでもイスラムでも、あるいは東南アジアでもアフリカでも、そうした文明はそれぞれユニークなものを持っている。そしてそれはある意味で、次の文明の形成にとって、貴重な示唆をそれぞれ持っている。それを交換しあう。さまざまな文明が、そのよいところを出しあいながら、二十一世紀の地球文明のあり方を考えていく時代、そういう時代に我々は今生きていると思うんであります。

それで日本もそういう意味で、決して特殊な日本列島だけに閉じ込められている、ほかの世界には何らの意味も持たない文明ではなくて、ある面ではやはり普遍的価値を持っている文明である。人類全体に対してどこかで貢献し得る価値を持っている文明である。だから研究しよう。そういう目で日本を研究するのは、異国日本の研究でも、近代化日本の研究でもなくて、まさに普遍日本の研究であります。このような普遍的な見地で、日本を研究する。こういう普遍的な立場から、日本の文明の至らないところ、世界的に見ると欠けているところ、こういうところも研究してくださっていいわけでありますが、とにかくそういう時代に入っているのではないかと思うわけであります。そしてそれがまさしく、昨日の記念講演会で示されていたと思うのであります。

レヴィ・ストロース先生は、今度は西欧の国々が日本から学ぶ番であると、講演を結ばれました。これは恐らく日本に対するほめすぎでありましょう。しかし、決して日本文明というものが、特殊日本的であって、日本人だけにしか意味がない文明ではない。そうではなくて、普遍性のあるところもあり、世界のこれからのあり方について、寄与し得るものがあるということを、先生はいろいろな例を挙げて示してくださったわけであります。

また、ドナルド・キーン先生は、今や日本文学は世界文学の中に取り入れられたが、それは日本のためにめでたいことであるだけでなくて、世界のためにもめでたいことであると言われました。これも日本文学というものが、決して日本だけに閉ざされてない。世界の文学を豊かにする一面というものを担い得るんだと、そのような意味で研究することができるような時代になった。これがめでたいことであるというふうに、おっしゃったのだと思います。

それから梅原猛先生は、日本の原あの世観を取り上げられて、そういう日本の古い、たとえばアニミズム世界観というものが、環境破壊や資源枯渇に悩む現代の危機を乗り越えていく、これからの一つの思想的手立てになるかもしれない。そういう可能性について、指摘されたわけであります。

これらはみんな、そういう普遍日本の研究という新しい段階だったと思うのであります。急いでつけ加えておかなくてはならないのは、これは日本のナショナリズムの意識とか、日本の優越性とかいうようなものと、全く無縁のことであります。なぜなら、私はここで、そういうふうに普遍的な見地から研究ができるということは、日本の文明についてだけ言っているわけではないからです。ヨーロッパ文明も普遍的な見地から研究できるが、それだけが普遍的なのではない。そうではなくて、世界のあらゆる文明が、普遍的な面を持っている。それを出しあって、二十一世紀のよりよき文明の構築を、相共に協力していこうという、そういう地球的な時代を迎えていると言ってるのでありますから、これは日本だけがいいとかいったナショナリズムと、全く無縁な、新しい地球的な意識なのであります。

上山　お二人が、日本学研究の基本的な問題点、それを一種のタイポロジーの形でお出しになり、ご両人のご意見が交錯する点もたくさん出てまいりました。伊東先生のほうは、科学史というご専攻の立場から、トーマス・クーンさんが『科学革命の構造』(The Structure of Scientific Revolution)という本でお使いになったパラダイムという概念の意味に即して、あれを使うのは少し誤解が起きるのではないかというふうなお気持ちで、あれは体系がゴロッと変わっていく図式でございますから、別に優劣がないと言われても、何となく発展順序の上で、優劣があるような感じがあるので、置き換えたらどうかというご提案だったと思います。

今度のこの国際的な研究集会が、お二人が第三段階というふうに言われている段階に、第一歩を大きく画したような意味を持つのではないかというふうなコメントであったのではないかと思います。どうぞお二人のご意見を踏まえて、自由にご討論いただきたいと思います。

ワーゴ　両先生のお話を拝聴しまして、共感するところもいっぱいあります。ことに、伊東先生のご指摘が、主に正しいかと思いますが、二人とも進歩的な、一つの方向に向いてるような感じを受けまして、それに対して、ちょっと疑問があります。

というのは、ことにアメリカにおいては、最近いわゆる相対主義に対して、ものすごく反発が起こりつつあるところなんです。いわゆるポスト・モダンのものが、相対論ではないとしても、相対論的なにおいがものすごく強いので、ポスト・モダンと言っても現代型の相対論主義だという人もいるだろうと思いますが、一応、それはある学者たちの間では非常にはやってるんです。各文化がそれぞれ独立しながら、将来貢献できる、という考えがある。私もそういうふうに望みたいんですが、一方どうも絶対論というんですか絶対価値観がどこかにあって、イスラムとか日本型のいろんな主張とか、キリスト教の主張とか、みんなそれぞれが正しいとは言えな

い。本当の真理がどこかに存在してるので、それを求めなければならない、というような気持ちが日本にもだんだん現れてきてるんじゃないかというような感じです。そういう絶対論的な考え方と今先生方のおっしゃったような相対論とを、どういうふうに考えればいいんでしょうか。

つまり、矛盾するのではないか。一方だけに進むのではなく、一応戻る。しばらくある方向に行って、それでまた逆戻り、こういうような動きではないかなというような感じが強いんですけれども、いかがでしょうか。

ネウストプニー　進歩という言葉を、伊東先生もお使いになりましたし、進歩的な発展とよく言われますが、どうも私自身は科学の変化について、進歩という言葉をできるだけ使わないことにしています。

音楽の例を一つ挙げましたけれども、音楽の場合には、私たちはたとえば黛はモーツァルトより当然いいだろうというようなことは、考えておりません。それと同じような科学での発展の考え方ができるかどうかは自信はありません。もう少し複雑かもしれないんです。でも、科学での「進歩」に関しては、基本的には、それと似ているような考え方を私たちがとるべきではないかと思います。

上垣外　今ちょっと芸術と科学ということに触れられたと思いますが、少なくとも芸術は、時代ということと関係がない。価値に関しては関係がないというふうに言っていいかと思うんです。違う意見の方もいらっしゃるかもしれませんけれども。つまり古いものがつまらなくて、新しいものが必ずいいとは言えない。たとえば、バッハのほうがシュトックハウゼンよりぼくは偉大だと思います。

ところが、少なくとも自然科学においては、そういうパラダイムという言葉を使って言いますと、やはり古いパラダイムよりも新しいパラダイムのほうが、少なくとも現象を説明する限りにおいては、より有効である。あるいは合理的であるということで、古いパラダイムは捨てられ、新しいパラダイムが採用されたわけです。たとえばコペルニクスが地動説を出した場合、これは地動説が絶対的な真理ではありませんけれども、少なくともそれまでの天動説よりも、暦とか日食とか月食とか、そういったものが正確に計算できるわけです。つまりより合理的であるということです。ですからパラダイムが転換したのだと思います。

そうしますと、科学の世界では、パラダイムというのは、新しいものがより有効である、というふうに判断されて変わってきいる。それでは私たちの日本研究というものはどうであるか。これは科学ではないのか。科学であるとするならば、新しいパラダイムが古いパラダイムに対して、より有効であるからとして、採用されたんじゃないんでしょうか。

上山　ご意見の趣旨は、日本学、日本研究というものがもし科学であるとすれば、そのパラダイムという言葉を使うと、後のパラダイムのほうが前のパラダイムより、より進んでるということになる面があるのではないか。そうすると、その使い方はあまり適切ではないというご意見でございますか。

上垣外　そうです。仮にジャパニーズ・スタディズ型とジャパノロジー型が、両方並存して、同じ意味を持ち得るというのでしたら、それはパラダイムと言えないのではないか。ですから自然科学におけるパラダイムの転換と、人文社会科学におけるパラダイムの転換というのは、恐らく違うのではないか。であったら、パラダイムという用語を使っていいのかという気がするんです。

ネウストプニー　芸術の場合には、多少問題が違うということは、これはよく私も意識しております。芸術の場合には、思想の問題もあります。ですから、違うけれども全く別の問題だとは思いません。

日本研究の現代型パラダイムがジャパノロジーよりいいかということですね。一つの革命を体験した場合には、それは新しいものがいいというふうに考えるようになるかもしれません。ただ、二つかそれ以上の革命を体験した場合には、もう少し自信がなくなるのではないかと思います。

私は個人としては、日本研究の場合だけではなくて、言語学のパラダイムの交換の研究から出発したのですが、やはり革命が割と多かった。いろ

いろな人がこれがいい、終着点に達したというような言い方をそのたびにしますけれども、どうも信じられなくなりました。もっともクーンもそういうことを言ってますが、前のパラダイムより新しいパラダイムのほうが、たくさんの事実を説明できる。しかも広い。たしかに日本研究のジャパノロジーのパラダイムの範囲は、非常に狭いです。それよりは現代の範囲が広くて、その点では積極的に評価できると思います。ただ、ジャパノロジーには方法論がないんじゃないかというようなこと、だめだというようなことを昔は考えていたんですけれども、それは間違っていると思うんです。方法論が二回も変わって、構造主義時代には、私たちは構造主義の方法論が最高のもので、これこそ正しい方法論だというふうに思っていました。現在は、また構造主義はだめなもので、もっと違う方法論が必要だというふうに、考えていますけれども、また今度パラダイムが変わったら、私たちの考え方がどうなるかということについては、私は自信を持ってはおりません。

芳賀　今のやりとり、なかなか興味深いところですが、肝心なのはさっきネウストプニーさんがご自分のサマリーの中でおっしゃったように、第一のパラダイムとされるジャパノロジーでも、それから第二のパラダイムとされる日本研究型のものでも、第三のものでも、いい研究であればいいんだとおっしゃってた。そこが大事なんじゃないかと思うんです。だから、ジャパノロジーで代表的な研究といいますと、たとえばジョージ・サンソムの「ジャパン・ア・ショート・カルチャー・ヒストリー」一九三十何年か、あれはやはり古いジャパノロジーのタイプだろうと思いますが、しかし歴史書としていつまでも生き得る一つの古典にさえなっている。だからあれは、どんな時代にどんなポスト・モダンのパラダイムが来ようとも、あれはやはり生き続けていく研究書である。それから日本研究、ジャパニーズ・スタディズの分野でも、たとえばマリウス・ジャンセンの「坂本龍馬アンド・ザ・メイジリスト・オレーション」あれも非常にその近代化という見方を鮮明に出して、それを社会の変動から人間の心理の変化にまで、一貫して見ようとした非常にすぐれた研究。だからいくらポスト・モダンになろうとも、生き続けていく、すぐれた研究。

結局、いい研究というのは、どこかでパラダイムあるいはタイプというようなものに、関係しているかもしれませんが、別な基準があって、生産され、生き残っていくのではないか。ただし、三つ目のネウストプニーさんがおっしゃるポスト・モダン型の新しい現代型のパラダイムというところでは、どういうのが今までのところマスターピースと言われているのか、それは私全然知りませんので、サンソムやマリウス・ジャンセンなんかに対応し得るような、いい研究の例を挙げてくだされば、もっとパッとわかると思うんですが。

それからもう一つは、一番最初のネウストプニーさんの話の分類の仕方の第一のカテゴリーだった地域のスタイルですね。SSとかTSとかニッポニクスタイルとかいう、あれはあまり意味がないんじゃないか。何となく、ああいうことを言いだすと、韓国には韓国の流儀があるし、ポーランドはポーランドもあるし、タイにはタイのやり方があるし、しかもネウストプニーはネウストプニーのスタイルがある。ドナルド・キーンはドナルド・キーンでいくということになりますと、結局何をも分類したことにならないでしまうんじゃないかと思いますけれどもね。アメリカの中でも、ドナルド・キーンとサイデンステッカーはかなり違うだろうし、ブラウワーはまた違うだろうし、だから結局個人のスタイルが問題になってくる。やはり個人のスタイルが出ているような研究のほうがいい研究でもある。地域の特徴の中に解消されてしまうぐらいのスタイルのものでは、ろくな研究はないとも言えるんじゃないかと思います。

それからもう一つは、伊東さんのコメントの中で、一番最後に普遍的な文明としての日本の研究ということを、第三の段階というふうに挙げられましたけども、これもちょっとさっきのワーゴさんのスケープティシズムと同じような懐疑の念を持たざるを得ない。伊東さんは非常にオプティミストであって、二十一世紀の地球文明というのは、非常に明るい、相互理

解が行き届いた楽しい人類社会であり、それに寄与するものとしての日本研究と、これはやはりちょっと楽観的にすぎないか。そんなものに何の寄与もしない研究だってあっていいんじゃないかと思います。あるいはそういう明るい日本将来の地球文明を批判するようなものとしての日本研究、それもあり得るわけです。だからそういう逆な形で寄与することもあり得る。しかしその寄与する寄与しないというようなことは、考える必要はないのではないか。その考えは前代科学までの日本研究と同じような、どこか功利主義的な、やはり進歩史観に伊東さんも侵されている。科学史家というのは、どうもみんなそうらしいですが。(笑)ちょっと伊東さんに対する批判です。

上山　お二人におっしゃりたい点もあろうかと思いますが、どうぞ。

シャモニ　地域スタイルに関しては、芳賀先生に大賛成ですけれども、テュートニク・スタイルの砦とされてるハイデルベルグ大学の者として、つけ加えたいんです。

パラダイム論は大事だと思いますが、パラダイム論には、私は基本的にやはり序列がある、そして進歩というものがあると思います。ただしその進歩は、単純な一線ではないのであって、たとえば自分がどのパラダイムに属しているかと考えたら、同時に三つどれにも属しているといえます。一人の人間の歴史の中に、三つが並んでて、ネウストプニーさんもおっしゃってたように、自分の経験では三つのパラダイムを通ったということです。

ちょっと具体的になりますけれども、西ドイツの場合は、この三つのパラダイムは確かに存在した。そしてそれは天から降ってきたわけじゃなく、歴史的、政治的な背景があるということを意識すべきです。ジャパノロジースタイルのものは、私がもともと習ったパラダイムですけど、それはいわゆる東洋研究、オリエンタリスティックから出たもので、ドイツではこれにはもう一つの特殊な条件があって、それはナチ時代の経験です。ナチ時代では、日本研究は非常に現代風になったんです。現代日本の研究は、たいへん重要なこととされて、実を言うと、戦後近代以前の研究ばかりやった先生たちも、戦争中は現代日本の研究をやったんです。ドイツのことわざで、やけどをした子供が火を避けるということがありますけれども、そういうやけどをした子供たちが、戦後先生になって、古いジャパノロジーを築きあげたんです。

だから、ジャパノロジーには二重の起源があります。一つは古い東洋研究から出たということです。もう一つはナチ時代の経験、それに対して六十年代以後、学生運動の批判が出たわけです。自分もその中で勉強した世代ですから、身をもって知っています。じつは、我々が接触した日本人と大学で習っている日本学とは、関係ないということに驚いて、そしてものすごく激しくその当時の先生たちを批判した。方法論のない科目を早くつぶせというふうにも言った。また、最初の日本学学会というのは、ドイツでは七十一年あたりだと思うんですけれども、そのときに学生と、ぼくは当時助手だったけど、助手たちが一緒になって一つの決議案を通して、その中で教授どもは自分の専攻を名乗れ、日本学というものの後ろに隠れるなというふうに、(笑)要求したんです。

その結果、ディシプリンを重視することになって、社会学、歴史学、文学研究、等を大事にし、その反面日本という統一を無視しようというような傾向が出てきました。全体としてもちろん社会科学重視という傾向があったけれども、ほかの分野もある程度認めるという方向だったんです。

そのパラダイムでは、結局日本という、ドイツ語で言うとErfahrungsgegenstand、つまり「実際体験できる対象」がなくなって、あるいは非常に影が薄くなって、学問で考想される対象、つまり社会、経済、文学、そういう抽象的なものだけがあるかのようになったんです。ただしよく考えると、実際は社会というものは存在しない、たとえばこんなふうに人間が座っているんで、その人間を社会学の対象にしてもいいし、医学の対象にしてもいいし、心理学の対象にしてもいいわけです。とにかく、学生運動側のジャパノロジー批判が、ものすごく強くあった。もう一つは、妙なこ

とに同じ方向を向く体制側の要求があったんです。体制側から、もっと学問的、もっと科学的な研究を要求してきて、今までのジャパノロジーは役に立たない。今の経済成長する日本を理解するには、役に立たないという批判が出てきました。その二つの正反対側からの批判は、妙に同じ方向に行ったんです。

そして、それは非常にこまかく区分される、別々な分野をつくろうというふうな方向に行ったんです。実際西ドイツでは、大学の変化は、非常に動きがゆっくりですから、そういうパラダイムが認められるようになるまで、時間がかかるし、組織自体が変わるのは、非常に時間がかかるんですけれども。

それに対して、こういうすべてを学問で処理する態度に対して、やはりErfahrungsgegenstand Japan、「実際体験できる日本」を大事にして、学問以前の体験を大事にするような傾向が若い人たちのあいだに出てきました。そういう実際の体験を大事にすることから、公害とか女性問題、女性史、小数民族、個別的な学問分野で、整理できないいくつかの分野にわたっているテーマを、取り上げるようになったんです。

そういう第三段階のパラダイムでは、いわばもとの日本学的な、統一的な全体的な観察が、またよみがえるという面があります。そういう意味で、ぼくは二年前、ハイデルベルク大学で日本学の研究室をつくることになって、そのときにどういう名前をつけるかということになったとき、ぼくは昔からジャパノロジーという名称がきらいで、この名称にまつわる現実をずっと学生時代から批判していたけれども、やっぱりジャパノロジーとつけたんです。（笑）

そうすることによって、「日本学」という枠組の中で個別分野(disciplin)の学問ではやれないようなテーマ、今の大学ではややもすれば忘れられがちな根源的な問いも視野に入ってくるのではないかと思うのです。私はどうも学問よりも学生を考えてるんですけれども、学生がいろんな非学問的な興味をもって大学に入ってくるのですが、その非学問的な興味を、つぶさないでどのように学問のほうに導くかということが問題です。その非学問的な興味の中に、日本人と接触して得られる日本の「もの」、それを理解したいという非常に原始的な気持ちがあるんです。その原始的な気持ちをどういうふうに発展させるかということが大事で、そういう意味で第三のパラダイムでは、第一のパラダイムと第二のパラダイムが、吸収されているんではないか、一種のディアレクティク「弁証法的」な発展すなわち一種の進歩じゃないかと思います。

上山　どうもありがとうございました。先ほど芳賀さんが第三段階のモデルになるような傑作というのは、一体何を考えてるのか。クーンの場合には、いろいろそういうモデルになるような業績がパラダイムというものの変換の一つの大きな糸口になるという指摘があるわけですが、仮にクーンの概念と少しずれているとしても、第三段階のモデルになるようなものとして、何か思いつくものがあったら、あげていただけますか。

いま第三段階の位置づけを、うまく体験を通してお話になったので、今後の議論のために仮に挙げていただければと思います。

シャモニ　それはやはりこれからのことじゃないですか。（笑）

李　いつも痛烈に感じていることですが、日本人はアジアにいながら、欧米と日本の関係に主に重きを置いているので、対話が偏ったものになると思うんです。今のジャパノロジーの議論も同じです。ネウストプニーさんの日本研究のパラダイムというのも西洋人の側から見たものですね。

即ち第一の日本のパラダイムの場合、そのモティベーションと言えば、宣教師たちがキリスト教を宣教するために、日本に関心を持ったり、研究したものです。それと同じく日本が韓国を研究したのも、韓国の文化を知るために研究したんじゃなくて、植民地を支配するための研究なんです。いくら学問的研究といっても、歴史社会的に見ると、支配のための研究か習うための研究かと、大きくフレームが分けられてくるわけなんです。

ポスト・モダンとか客観的な研究は、教わるとか、支配するとか、そういうものよりも、一つの文化としての研究対象として、一つの研究現象と

してクールにとらえる立場だ。たとえば、ロランバルトの日本人論なんかは、第一のパラダイムでも第二のパラダイムでもないんです。シニフィエよりはシニフィアンのほうに向いている関心なんです。日本というよりは、それは記号論自体に対しての関心である。しかし、自分の記号論を展開するために、日本のモデルが最もいいから日本研究をする。そういうことは今まで支配したり支配されたり、教わったり、そういうものとは少し違うことだと私は思っています。

しかし韓国側から見たジャパノロジーのモティベーションは西洋のそれと正反対になっています。具体的な例を一つとってみましょう。古代史とか言語学をやる日本研究者たちは、自分の優越性を楽しみにして研究してるんですよね。日本が今いい顔をして言っても、昔の言語とか歴史、考古学をやってみると、日本はかつて、すべての面で私たちの弟子であったんだと思う。だからそれを研究している人は、誇り高いんですよね。しかし、経済とか近代化を研究する人は、本当に劣等感でじっとすみっこに縮まってるんですよ。だから同じ日本研究者でも、言語学とか古代史を研究する人は肩幅が相当広くて、『日本書紀』とか『古事記』なんかを読むときは、決してひけをとらないんですよね。日本式に読むとわからないけれども、韓国の歴史で見れば、よく見える。日本の学者が日本のコンテクストでいくらあの古代史を研究したって、それは全然わからない話だ。そういう優越感があるわけなんです。

もう一つ、今真剣に議論されているポスト・モダンですけれども、ポスト・モダンというコンテクストは、伊東先生がおっしゃったような、日本も普遍性を持っている一つの文化だという、そういうものじゃございませんね。ポスト・モダンというものはモダンの反逆なんですよ。近代でできなかったもの、行き詰まったものに反逆的に現れるものですね。今までは日本が近代化するためには、欧米にモデルを持ってきたんだけれど、欧米に勝ち抜いた結果、経済とか政治の方面で、日本に優秀な何かが現れてくる。そういうことでポスト・モダンの話をするときは、日本が欧米への劣等感から逃れて、優越性をもつ。価値観で見ると、日本文化の客観視というよりも、日本文化は欧米文化よりよりいい文化だという価値観を持つようになる。

韓国でみますと、解放されたそのすぐ後には、日本学というものは全然ございませんでした。みんなアメリカ研究で、アメリカを習ったわけなんです。今は、日本に偏っているのは、一つの具体的な例で話を終えると、同じコンベアベルトという生産ラインでも、トヨタ式とフォード式は違うんですね。同じマスプロダクションの近代の方法を受け取っても、フォードでやったことは、機械中心で人が機械に合わせますけれども、トヨタとかホンダでは、人間に合わせてコンベアベルトの生産ラインをつくるので、その点が違ってきます。韓国では、どのコンベアベルトラインのシステムを取り入れたかというと、トヨタ方式のものを取り入れたんです。そうすると、それは、経済の問題のように見えますけれども、つきつめれば、人間と機械の関係をどうとらえているかという、一つの文化論になってくるわけなんです。

こうしてみますと、反日感情とか昔の古代史、そういう関係じゃなくて、現実に役立つものは何か、アメリカ的方式か、日本的方式かを問うときに、ノウハウだけではなくて、一つの思想的な文化的背景の研究が生まれる。そうすると、ジャパノロジーの第一のパラダイムに戻っていく。ですから、欧米から見ると三つのパラダイムがきちんとしてるように見えますけれども、韓国とか台湾とかNIES諸国で見ると、これは三つのパラダイムがごちゃごちゃになって、進歩どころじゃなくて、共存したりまたは対局的な立場になったり、もっと複雑ではないんだろうかと思います。

上山　どうもありがとうございました。まだいろいろあると思いますが、発表者のお二人に少しずつ話していただきましょう。まず伊東先生から。

伊東　ワーゴさん、芳賀さん、李さん、三人の先生方からご意見がありましたので、簡単に申し上げます。

まず第一番に、ワーゴさんがおっしゃった相対主義の問題ですが、相対

主義というのは、私は絶対主義よりずっといいと思ってます。一元的な絶対主義、何か一つを信じて他を排他的に取り扱う態度よりも、多元的な価値を認めるほうが、どれほど寛容であり人間的であることか。ですからぼくは相対主義を決して否定的にはとらえません。

しかし、人間は同時に人類として一体なんです。だから相対的にいろいろなものが違っていても、最後は一つの方向に向かっているという希望があります。そして我々人類は、いろんな地域や歴史に限られて、時間的空間的に制限されて、その人類性をどこの地域も部分的にしかまだ顕現していません。だから、ヨーロッパはこういうところで、あるいはアフリカはこういうところで、韓国はこういうところで、人類性に対してさまざまな貢献をしていると思います。それをやはり公平にとり上げて、そして総合していくということ、これは決して何かぐらぐらした弱々しい相対主義ではなくて、人類の本当の平等な一体性を求める今後の課題なんではないかと思うんです。

芳賀さんは、私が非常に楽観的だと言いました。僕は確かに楽観的です。そして世の中はだんだんよくなってると思ってます。日本学もますますよくなっていると、私は思っております。さまざまな文明研究というものが、それぞれ独自な意味を持っている。やはり意義というものがなかったら、研究者はやっていけないじゃないですか。その意義というのは、自分は単に一局部の特殊なことをやってるんじゃない、一見そう見えても、それが世界や人類のために役立つことをやってるんだということをどこかで信じてると思うんです。日本研究もそういうふうになり得ていることを、私はいいことだと言ったわけです。

ネウストプニー　ポスト・モダンのすばらしい研究の例はないのか、という点ですが、私は、そういうものはまだないのではないかと思います。ポスト・モダンの意識が非常に強く、それを一つのプログラムとして立てるという研究はいろいろあります。ベフさんもそうだと思いますし、それから杉本とマオアですね。これは非常に強くモダンとポスト・モダンの区別を意識して、いろいろなことを書いているのは確かです。

またポスト・モダンのすばらしい研究が出てくるかという問題については、もう一つ申し上げたいことは、ポスト・モダンのすべての特徴を持っている研究が出てくるかどうか。一部の特徴があるけれども、すべてがポスト・モダン的なものではないかもしれないです。ちょっとそこは私たちが大きすぎる期待を持ってはならないのではないかと思います。

それからシャモニ先生がおっしゃったことは、私にとってはとても嬉しいお話だったんです。私がほうぼうに書いているものを読んでくださるかどうかはわからないんですけれども、時代のパラダイムの交換について、全く同じような経験を持ってらっしゃるということは、非常に嬉しいと思いました。確かにジャパノロジーについての、シャモニ先生の感じてらっしゃることは、私の感じていることとほぼ同じです。それは、今ちょっと探してみたんですけれども「日本研究のパラダイム」で一つそういうことを書いたパラグラフがあります。つまり、日本研究型の時代には、日本というものが、日本という現象がなくなりました。個々の学問、個々の方法論によって見るのはあったけれども、日本というものはなかった人です。それがジャパノロジーにはありました。私たちは、またそれを復活させて、もう一回一つの全体としての日本を見たいと思ってる、そういうことが確かにあると思います。

次にナチ時代の研究ですね。それは現代のことを非常に強調していったという指摘は、すごくおもしろいことだと思います。それはパラダイムがかわったということじゃない。そこで私は第三の要因として、機能的タイプというものを立てないと、説明できないと言おうとしたわけです。その概念を使うと、やはり特定の目標、特定の利益のために日本研究を使う場合には、日本研究のまたちょっと違うタイプができてしまうということがあるのではないかと思うんです。　伊東先生、それからディスカッションでいろんなことを教えてくださった先生方に心から感謝しております。